



# 札幌市経済界フォーラム 経済のグローバル化と地域の生き方

札幌市経済局  
さっぽろ産業振興財団

札幌市とさっぽろ産業振興財団は、平成24年1月25日、札幌市経済界フォーラムを札幌で開催しました。

本フォーラムでは、世界経済のグローバル化の中で北海道・札幌の向かうべき進路はどこにあるのか、政治学者として活躍されている山口二郎北海道大学大学院教授の基調講演「グローバル危機と北海道・札幌の進路」と、パネリストに同氏及び横山清(株)アークス代表取締役社長、上田文雄札幌市長・さっぽろ産業振興財団理事長、コーディネーターに林美香子キャスター・慶応義塾大学大学院特任教授によるパネルディスカッション「北海道・札幌のブランド力をどう活かすか!」を行いました。その概要を紹介します。

## 基調講演

### グローバル危機と北海道・札幌の針路



山口 二郎 氏  
北海道大学大学院法学  
研究科教授

#### 改めて3.11の教訓を整理する

3.11の教訓は一体何であったのか。日本を襲った大きな外傷でした。同時に、日本の社会をむしばんでいた慢性的疾病を顕在化させました。人口の高齢化や減少、地域経済の疲弊、公共サービスの劣化といった問題です。ここで、日本という国の特徴、「自然災害のリスクが最も大きい国」ということをよく理解しておく必要があります。

小泉政権時代の構造改革のスローガン「小さな政府」の淵源は、18世紀イギリスの思想家アダム・スミスです。イギリス・スコットランドのグラスゴー大学で教えていました。地震も台風もない、自然災害のリスクを全く考えなくていい地域で、小さな政府というアイデアが生まれ育ったということです。スミスが言った政府の役割に「軍隊、警察、裁判、土木事業」はありますが、「防災」はありません。リスクの小さい社会では政府の仕事は小さくできますが、日本は、何事もないときには無駄に見えるようなストックを持っていないければ、いざというときに社会全体が死滅してしまうような危険性を抱えている。リスク国家日本という

観点から国土のあり方を考えなければなりません。

そして、特に福島第一原発事故を見て、改めて国土の重要性を感じます。先祖から受け継いだ国土がわれわれの世代の欲望追求やわがままによって汚染され、後世の人々が住めない状態をつくり出し、住んでいた人々が難民になった。この罪をまじめに考えなければなりません。国土は、その上に住む人間の暮らしと不可分一体だということです。

#### 震災が示した日本国家の病理、官僚主義を克服する

大震災で浮かび上がってきたのは国家の無責任体制です。福島第一原発事故がその典型例です。「想定外」という言い訳をした専門家は、自分が想定していないだけで、想定した議論をしようとした人々を黙殺してきました。バブル以降の失われた20年も、いわば自己修正能力の欠如のもたらした病理です。

人間は自分を正当化したいという本能を持っていますから、違った考えを持った人が複数ぶつかり合う相互作用の中で、自己修正能力を発揮していくことが必要になります。そこにこそ民主主義の強みがあったはずですが、異論を封殺、無視するという政治や行政の文化が、問題を隠ぺい、敗北をごまかすという大本営体質をもたらしたわけですから、処方箋はより多くの民主主義（モア・デモクラシー）になるわけです。

官僚主義とは現象です。人間味の発想や行動です。擬似目的による本来目的への置きかえ、本来の目的を少し言いかえたもので設定して、擬似目的を達成して仕事をしたような気になる、これが一つの官僚主義です。また、人間は自分の頭の中に「プロクルステスのベッド<sup>※1</sup>」という狭いベッドを持っていて、はみ出すものがあれば切り捨てるという行動をとりやすい。例えば、菅政権時代の片山総務大臣は、震災復興の補正予算を組むときに、財務省は裏づけ財源の見通しが立たないと予算が組めないと言う。救急病棟に患者が担ぎ込まれたときに、財布を見て、お金があったら治療しましょうというような話だとおっしゃっていました。これなども、プロクルステスのベッドの一つの現れです。これが官僚主義の二つ目の問題です。

※1 プロクルステスのベッド  
ギリシャ神話に出てくるプロクルステスという追いはぎは、捕えた旅人を自分のベッドに無理やり寝かせ、身長をベッドの長さに合わせ切ったり引き伸ばしたりしたことから、物事の勝手な解釈や拘り定規なことなどの比喩として使われる。

そして、福島第一原発によって、中央、地方の上下関係が明らかになりました。大きな矛盾を抱えた原発という巨大な公共施設を地方に押しつけ、地域振興という名の補助金、交付金に依存しなければ生きる道がない、従属の構造をつくった。そういう意味で、本当の意味での地域振興、地域の内発的な発展や自立の可能性を改めて考え直すことが求められています。

#### 大災害にどう人は対処するか

大災害で日常秩序が崩壊したときの一つのイメージは、略奪、暴行が横行するような混沌、無秩序です。しかし、全く別のイメージがあります。アメリカのジャーナリスト、レベッカ・ソルニットは、著書『災害ユートピア』の中で「日常秩序が崩壊したときには、人間はだれから命令されなくても、自然発生的、自発的に弱者をいたわる、みんなで助け合う、食べ物を分け合う、弱い者をいたわる、そういう能力を持っている」と言っています。この相互扶助、連帯を、いわば平常時にいかに持続するかが課題となります。

#### リスク国家日本における北海道の位置

リスク国家日本においては、北海道という空間そのものが重要な意味を持っています。大都市が水、食料、エネルギーなどを常に外部に依存しなければ生きていけないぜい弱な存在であるのに対し、北海道は自己完結的に、ほかの地域に移出する供給力を持っているという意味で、リスク国家日本にとって重要で不可欠な位置づけを持っています。

北海道新幹線の札幌延伸は、北海道には福音ですが、東京から見れば無駄だと言います。しかし、そうした議論はあまり意味がない。リスク国家日本においては、リダンダンシー（余剰性）、バッファー（緩衝、余裕）として北海道のさまざまな基盤を位置づけ、正当化する論理で立ち向かわなければいけないと思います。

#### グローバル化時代の地域づくりー地域づくりのモデル

地域づくりには、アメリカ型とヨーロッパ型の二つがあります。アメリカ型は、人が移り住んで開拓する焼畑とゴーストタウンの繰り返しです。それに対して、

都市の中心部に路面電車、人が行き交い、いろいろな店がある。これがヨーロッパ型です。コミュニティーがあり、まちの伝統がある。自然発生的にではなく、人間の意思でつくった結果です。

そういう意味で、北海道の考えるべきモデルは、ヨーロッパ型のモデルを基調に、人口の減少、高齢化、過疎化を加味して、拠点集約といった発想を取り入れた形で考えていくしかないだろうと思います。

#### 地域が考えるべき自律と自立

自給自足で地域の公共サービスを賄うという「自立」は、目標にする必要はないと思います。どこの国を見ても、人口の集中する首都、大産業地帯で富をつくり、国内の他の地域に再分配するのが当たり前です。大都市は水も食料も生産できず、地方に頼らざるを得ないので、自立議論はナンセンスです。

問題は自分で律する「自律」です。北海道は、自分たちで生きていく戦術、戦略を持っているのかです。地域はそれぞれの役割を持って相互依存のネットワークの中で生きています。北海道の場合、財源は外から入ってきますが、それを主体的に考え、より効果的に使っていくという責任感と知恵で、地域発展の戦略、シナリオを考え、チャンスの女神の前髪をつかむ意欲、構えを持っていることが必要です。

3.11を受けて、再生エネルギー促進法ができ、固定価格買取制度が始まります。これは、北海道にとって大きなチャンスです。

イギリスのスコットランドでは、13年前に地方分権を実現させ、100%自然エネルギーという政策が進んでいます。分権運動が始まったのは1980年代ですが、くじけずに運動を続けてきました。新しいパラダイムに必要なのは、非現実的であってもアイデアを温めておくことです。そうすれば、チャンスが来たときに提案して国を説得する能動性が生まれてきます。

#### 自己の特性の発見と戦略化

地域づくりには、外から見て素晴らしいと評価されるものを自分自身でちゃんと理解して、売り込む、そういう人材を増やしていくことが必要です。

北海道のアイデンティティーのキーワードは、自然環境です。気候の冷涼さ、空間の大きさ、大学で仕事をしている者には自由な空間も貴重です。首都から距離があることも自由さを担保します。

高い目標を設定し、それにあわせて人を育て、人を集める、機会を与え、資源を投入してやる気を出させる。北海道には、既に日本ハムファイターズという成功したビジネスモデルがあります。悲観する必要はありません。

#### 地域からの政策発想

経済学者・小野善康先生の本に「これからの時代の景気回復は、高度成長期のように公共投資をやって、鉄とコンクリートで物をつくっていくことには限界がある。むしろ、人がいかに楽しむか、豊かな暮らしをし、充実した経験をするか、そこに金を投入するという機会、魅力というものをこしらえていく。それこそがこれからの公共投資だ」という一節があります。

札幌がリヨンやバルセロナに伍する心意気で、まちの魅力をつくるための知恵を結集することが必要です。情報発信する魅力的な拠点をつくり、ネットワークを広げていく。そのためには、とにかく市民が集まり議論し結びつく、下からの盛り上げが必要です。そういう意味で、地方分権と地域政策は車の両輪です。

### パネルディスカッション

#### 北海道・札幌のブランド力をどう活かすか!

##### 北海道、札幌の優位性

**山口** 北海道は土地が広く、新千歳空港から札幌の間でもまだまだ広大な空間があります。また、札幌を中心とした道央圏にはハードだけではなく、ソフトな面のインフラも整っていて、快適な生活環境もあります。とにかく空間が広いことが重要なメリットです。

札幌のように、道の広さ、空間の広がり、大都市機能がそれなりにある一方で、山や川があるといった条件を備えている都市は、そう沢山はありません。

**横山** 北海道と札幌というときには、札幌を別に考えなければいけません。札幌集中で北海道自体が平均値

では下がっていくのではないかと懸念しています。

田舎の子は都会にあこがれます。それをどう変えるのか。都会へ行ったきりだと、分散は絶対にできません。一極集中はまだ進むのだらうと思います。私が名誉領事をしているフィンランドでも、地方の生活を行政がサポートしているという現実があります。分散はものすごいエネルギーとお金がかかります。文化を変えていかないと、広い地域に分散して安定的なコミュニティをつくることは難しいと思います。



パネリスト  
横山 清氏  
(株)アークス代表取締役社長



パネリスト  
上田 文雄氏  
札幌市長・財さっぽろ産業振興財団理事長

**上田** ある意味での集中は当然必要ですが、一極になってしまうと弊害が出てきます。都市が適正に配置され、活性化を実現できるような運営のされ方をしなければいけないというのは当然のことです。

これまで役割論が極端に行き過ぎて、「北海道のために札幌はどうあらねばならないのか」というアプ

ローチではあまり議論されてこなかったと思います。北海道のためにどう貢献するか、それによらなければ札幌は繁栄できないということを意識して、まちを見直していかなければならないと思っています。

#### 実感する北海道、札幌ブランド力

**林** 北海道、札幌のブランド力という、食や観光は大きなパワーがあり、ポテンシャルを持っています。

北海道の食の自給率はカロリーベースで200%、全国一ですが、金額ベースでは140%で、加工し付加価値を付け、売り方も工夫しなくてはいけないという現実があります。横山さんは、北海道や札幌のブランド力をどう感じていますか。



コーディネーター  
林 美香子氏  
慶應義塾大学大学院システムデザインマネジメント研究科特任教授・キャスター

**横山** 食は非常に難しい問題があります。カロリーベースでは200%ですが、生産される食料品のほとんどが大量生産のアイテムに限られた商品です。よく「横山さんのところは北海道で、魚もおいしいし、素晴らしいですね」と言われますが、売っている水産物の半分以上は国内外からの輸入です。例えば、マス科のトラウトは、ノルウェーとチリから持ってきています。それでも北海道のベニサケよりもはるかに安い。チリから横浜までと、横浜から札幌のセンターに持ってくるコストは同じぐらいです。北海道は豊富な水産資源、豊かな農業地域と言っていますが、実際には全く様変わりの市場形成になっていることも事実です。ただ、その中で、私たちが北海道の良いものを売って、地産地消でやっています。まずは、北海道から外に持っていく、北海道のよさを知ってもらうということです。去年10月、八戸に本社のあるユニバースという会社を統合し、47店舗を全部見てきましたが、驚くべきことに、人が集まっているところはほとんどが北海道産の物です。北海道産のスルメイカ、サンマ、サバを選んでいきます。ある意味、北海道という名前が付くだけで売れるようなところがあります。

#### 札幌は食の都

**山口** この二十数年で、北海道における食の環境は激変しました。例えば、ワインの水準が上がりました。勉強し、苦勞して、自然環境や土地の恵みを生かした立派なワイナリーを築き、非常に価値の高いものをつくるようになったことが驚きです。その気になればもっと広がっていくのではないかと期待しています。

それからレストランの種類が増え、おいしいところが増えました。東京の友人を連れていくと非常に喜びます。味は東京水準かそれ以上で、値段は東京の3分の2です。先ほどお話したりヨンは、フランスの「食の都」と呼ばれていて、食べに行くお客がいますが、札幌の場合も観光と結びついて、大きな地域の産業になっていくと思います。

## 北海道フード・コンプレックス国際戦略総合特区

**林** 上田市長、北海道フード・コンプレックスについてご紹介ください。ずいぶんと壮大な計画ですね。

**上田** 大学や地域がこれまで培ってきた知恵を統合し刺激し合いながら、新しい機能性食品やバイオテクノロジーを使った薬や健康食品をつくるのが、北海道の食料基地としての役割だということで、付加価値を高めることを複合的にやっています。札幌が中心になり、全道に技術の恩恵を享受してもらえ、東アジアの拠点にしていこうという計画です。

**林** 北海道は、ブランディング<sup>※2</sup>やマーケティング、デザイン力が弱いという指摘がありますが…。

**上田** 北大のリサーチ・アンド・ビジネスパークに研究者が集まっていて、かなり実績が上がってきています。黒大豆「黒千石」は70年代に作付けをやめていたのですが、免疫力を高めるという効用を西村孝司教授が発見し、さまざまに利用していこうということで、今では500tぐらい生産しています。こうした成功事例を重ねていくことが大事だと思います。

**林** 横山さんも参加されている食のクラスター、フード・コンプレックスにどんな期待をお持ちでしょうか。

**横山** 準備していなければチャンスはつかめないと、何回もチャレンジしていますが、そう簡単にうまい話はありません。クラスター活動も一定の枠からなかなか出られません。今の話のように、知らなかった機能を持っていて大化けするかもしれないという商品を次から次へと繰り出していかなければいけない。ボリュームが小さい商品はまず地域に出してそれで飯が食えるようになれば、それをベースに割と思い切ったことができるだろうと思います。

**上田** 十勝ではボリューム感のある農業で品質の良い物を作っていますが、素材のまま売ってしまっています。それを帯広、函館、江別、札幌という連携の中で、道央圏で加工し価値の高いものにしていくという枠組みに発展させていく契機になると思います。

**林** 5年後の経済効果1,216億円、新たな雇用1万6,000人という大きな数字も出ています。相当な戦略を考え

て臨んでいかなければいけないと感じます。

**山口** 特区を利用して、国のいろいろなしぼりや干渉を排除して、北海道のローカルスタンダードで仕事を展開できれば、とても意味があると思います。ぜひ協力して実をとってきてほしいと思います。

**林** 北海道はこれまで原料として売ることが多かったのですが、伸び代はすごく大きいと感じています。また、未利用の資源も探すとまだまだ出てくると思います。横山さんのところには、生産者の方から売り込みが沢山あるのではないかと思います、いかがですか。

**横山** 確かに、良い物、おいしい物があります。でも、事業として成り立つような方法論を編み出していかなければいけないということです。

**林** そのためには、小さい事業者の連携、フード・コンプレックスのような形も必要だろうと思います。

### 都心部の街角景観は都市の顔

**林** 先ほどリヨンの話が出ましたが、リヨンはフランス第2位の都市で三ツ星レストランがたくさんある地域です。毎日、マルシェ（市場）が立って、市民が買いに行くことが定着していますが、デザイン力も素晴らしいと思います。

**山口** 食べるにはもちろん食の質が大事ですが、食べる雰囲気も大事です。札幌中心部の景色を見ながら食べるオープンカフェは一つの例ですが、上田市長には、札幌都心部の再開発や基盤整備で、歩いて楽しむ、街角で飲んで食べるコンセプトのまちを日本で最初につくことにぜひ取り組んでいただきたいと思います。

**上田** 歩いて楽しいまちということが、いろいろな意味で札幌自体のブランドを上げていきます。そういう意味で、駅前通地下歩行空間をつくり、道庁赤れんが前の一角をオープンカフェの常設スペースに計画しています。創成川公園も空が大きく見えるスペースです。人々がゆったりと街歩きを楽しめる雰囲気の中で、おいしいものを食べられ、いろいろな刺激を受けられるまちにしたいと頑張っています。

**林** 世界中からお客様が来るような素晴らしいレベルになってほしいと思います。

※2 ブランディング (branding)

ブランドの構築や管理を行うこと。会社・商品・サービスなどについて、他と明確に差別化できる個性をつくりあげること。

### 幅広い観光、ツーリズムの展開に向けて

**林** もっと幅広く、交流人口を増やしていくのがこれからの観光だと思いますが…。

**横山** 考えられることは全部やっています。ただ今も看板が上がっているのは営業目的どおりにはうまくいっていないということです。それを全部見直し、練り直して実行することです。新しい掘り起こしで、積み重ねると大きくなるとか、ゴーストタウンのようだった地域がにぎやかに勢いづくといったことの繰り返しをつくっていくことが必要です。

**山口** 私も個人的な社会的ビジネスで札幌時計台を会場にした札幌市民向けの教養講座をやっていますが、わざわざ遠くから聞きに来る人もいます。時計台は雰囲気がよく、話しをする人も、聞く人も喜んでくれます。そういう仕掛けをしていけば人は集まってきます。

ヨーロッパの大学はサマースクールで4～5週間のプログラムをつくり、学生寮から学生を一度追い出し、ツアーで来た人たちがその間、寮に住んで、昼間午前中は授業に出て、あとはスポーツや見物するというところで人がたくさん来ます。大学単体では人と金の余裕がないですが、地域政策の一つとしてサポートし、物的・人的バックアップがあればできる話です。

**林** 日本ハムやJ1に昇格したコンサドーレなどのスポーツツーリズムも含め、札幌のツーリズム、観光の可能性が広がるだろうと思います。

**上田** 石狩振興局管内8市町村で広域圏組合をつくっていますが、お互いに行き来しようと努力しています。周りのまちがよくなないと札幌は生きていけないという考え方でツーリズムを考えています。

### 北海道・札幌を舞台に、「札幌コンテンツ特区」

**林** 地域との連携は大切なキーワードです。そういう意味で紹介したいのは、「しあわせのパン<sup>※3</sup>」です。今までとは全く雰囲気が違う映画で、北海道のイメージが変わり、行ってみたいという人たちが沢山出てくるだろうと期待しています。そういう若い世代への情報発信も必要ではないかと思っています。

**山口** 北海道には全国的に発信する小説家のような人

たちがいますから、いろいろなイベントなどを仕掛けていけば、それも可能になってくると思います。

**林** 「探偵はBARにいる」で薄野に足を向けた方も多いのではないかと思います。コンテンツという点で、上田市長はどんなお考えをお持ちですか。

**上田** 札幌コンテンツ特区<sup>※4</sup>は、北海道がロケ地としてどれだけ素晴らしく、監督やフィルムメーカーに創作意欲をわかせる状況にあるということを中心に考えながら、規制をクリアできる体制をつくり、使い勝手のいいものにしようという試みです。映画は、地域のPRとして大事なイメージをつくり、創造意欲をかき立てる大事な産業です。映画の誘致を切り口に、既存の仕事をされている方々にも発想を豊かにしてもらい、そういう産業の位置づけにしていきたいと思っています。

**林** それでは最後に、皆さんからまとめのお話をうかがってはいかがでしょうか。

**山口** 私が子どもの頃もオイルショックやニクソンショックで「危機だ、危機だ」と言っていました。今の危機は確かに今までよりはかなり規模は大きいですが、乗り越えられないはずはありません。

もう一つは、知恵を出すということです。新幹線は大いに結構ですが、もっとスピードアップする動きを地域から起こしていかないと、できたときには北海道の人口が半分ということでは困ります。

**横山** 思いついたら何でもやるということです。私は「悲観的に考えて、楽観的に行動しよう」ということで、自らを蹴飛ばしながら走っています。

**上田** 住んでいる人が豊かな気持ちでなければ、対外的に魅力的なまちにはなりません。そして、感動を共有できるまち、いろいろなものにチャレンジしていこうという気持ちの持てるまちをつくっていききたい。

リヨンはメディアアートという部門で、ユネスコの創造都市ネットワーク<sup>※5</sup>をつくっています。札幌もリヨンに倣い、加盟する準備をしています。ぜひ、さまざまな感動が行き交えることができるまちづくりを皆さんと一緒にしていきたいと思っています。

※3 しあわせのパン  
洞爺湖のほとりで宿泊設備を備えたオーベルジュ式のパンカフェを営む夫婦と、店を訪れる人々の人生を四季の移ろいととも描いたハートウォーミングドラマ。原田知世、大泉洋主演の映画。

※4 札幌コンテンツ特区  
昨年12月に指定された総合特別区域法案に基づく地域活性化総合特別区域。アジアにおけるコンテンツ産業拠点都市の創造を目標に、「映像制作者が最も映像を撮りたい都市」を創る。

※5 創造都市ネットワーク(Creative Cities Network)  
2004年にユネスコが創設。映画、デザイン、文化、工芸など7つの分野から世界でも特色ある都市を認定したものの。